

サービスマーケティングの活動を通して

活動先：NPO 法人 生活支援センター わたぼうし
クラス：末盛 慶 先生

サービスマーケティングでの1年間の活動は、とても学び多い時間となった。サービスマーケティングの活動を通して学んだことは、3つある。

1つ目は、自分たちで計画して実行することの難しさである。私たちは、夏休みの6日間の活動をする上で、「自分たちで計画し、実行する力を養う」という目標を設定した。実際に計画を進めていく中で、計画書の作成や事前準備など今まで自分たちがやったことのないことに挑戦することもあり、スタッフの方の助けなしでは出来ない経験であったと感じている。私たちは、お菓子作りとお出かけを計画した。お菓子作りでは、簡単に作れるクッキーのレシピを探したり、実際に作ってみて分量を確かめたりした。お出かけでは、実際に半田市空の科学館まで歩き時間を確認し、当日観るプラネタリウムの予約をし、また親御さんに配布する“お出かけのお知らせ”の作成もさせて頂いた。自分たちでは計画に不備のない状態で当日を迎えたはずだったが、実際に子どもたちと活動すると、準備の段階では見えなかった問題も多々出てきた。お菓子づくりでは、作り方の簡単なクッキーを選択したが、作り方が上手く子ども達に伝わらなかつたり、お出かけでは、予想外の暑さに低学年の子ども達がばててしまったりと予想外の出来事にスタッフの方に助けて頂くことが度々あった。自分たちの説明の仕方では子どもたちは理解することが難しかったり、自分たちだけで行った事前準備と実際の子どもたちとでは、作業にかかる時間や周りの環境が違ったりしていたりと計画通りに進めることは難しい場面もあった。そのような時に臨機応変に対応していけることが大切であると感じた。自分たちで計画すると決め、活動を始めて、スタッフの方にアドバイスを頂いたり、自分たちで考えたり、初めての経験で戸惑うことも多かったがそれ以上に学ぶことは多く、この学びが今後活かしていきたいと思う。

2つ目は、子どもたちのあそびと成長である。私は、6日間の活動で「あそびの中で子どもたちはどう成長していくのか、成長とあそびの関係について考える」という目標も設定した。子どもたちは、色々なあそびをして過ごしていたのだが、その中で特に印象に残っているあそびは、「ドミノ倒し」「すごろく」である。ドミノ倒しでは、同じドミノを使って2種類のあそびをしている様子を見た。1つは、普通にドミノを並べて倒してあそぶあそび方である。4色のドミノがあったのだが、色にこだわって並べてみたり、仕掛けをどうしようかと考えたり、次はどう並べようか考えたり、ドミノ倒しのあそびの中に様々な考える要素があると感じた。もう1つのあそび方は、ドミノをブロックとしてあそぶあそび方である。ドミノを使って家を作ったり、家の中に置く家具を作ったり、想像を膨らませながら遊んでいた。1つのあそびの中に、考える力がついたり、想像力が豊かになったり、子どもたちの成長に欠かすことのできない要素がたくさんあるということを知ることが出来た。すごろくでは、2つのサイコロを振って出た目を足してコマを進めていた。

小学1年生の子にとっては、繰り上がりの計算が出来て、あそびの中で足し算の練習が出来ていると感じた。1つのサイコロでするよりも、考えることが出来るので良い方法だと思う。47都道府県の日本地図のすごろくもあり、日本の地名を覚えたり、特産品を知ることが出来たり、あそびの中に学びがあると感じた。また、あそびを通して子どもたちは、人に上手く物事を説明するというのを学んでいるのではないかと感じた。子どもたちとトランプをしていた時、ルールを忘れていた私に子どもたちがルールを教えてくれた。実際にゲームをしながら説明してくれることもあり、どう説明したら上手く相手に伝わるのか考えているように感じられた。

3つ目は、目標を持ち、積極的に活動することの大切さである。活動前に3つの目標を立て夏休みの6日間の活動に臨んだのだが、実際には受け身の活動になってしまった部分が多くあった。分からないことや疑問に感じたことはすぐにスタッフの方に聞く姿勢も大切だと学んだ。また、計画は自分たちが考え、動かなければ何も始まらないし、活動先にも迷惑をかけてしまうことになるので、積極的に動き、計画を立てていくことが大切であると学んだ。

以上のことが、サービスラーニングの活動を通して学んだことである。出来なかったことの方が多かった気もするが、出来なかったことをこのままで終わらせずに、実習などで今後活かしていきたいと思う。また、出来たことに対しては自身を持ち、自分のものにしていきたいと思う。

学童保育で活動をして、学童保育の必要性を考えた。わたぼうしは、民家を改築した場所で活動をしていた為に決して広い場所とは言えない。毎日50人近い子どもたちが利用していて、50人近い子どもたちが過ごすには狭い場所だと感じた。両親共働き世帯、女性の社会進出が当たり前になっている今、働く親にとって学童保育はなくてはならない存在ではないかと思う。学童保育の必要性がもっと社会に広まり、働く親の強い味方となって欲しいと願う。

わたぼうし内でのことではあるが私は、「わたっごはん」「わたっこまつり」を続けて行って欲しいと思っている。「わたっごはん」とは、わたぼうしのスタッフの方が作られる昼食のことである。実際に私も、6日間の活動中で頂いたのだが、栄養バランスも考えられていたし、毎朝忙しく毎日お弁当を作ることが困難な親にとってとても有難いものだと思う。また、「わたっこまつり」とは、夏休みに行われる行事で、準備から本番まで全て子どもたちが行っている。このように準備から本番まで全て子どもたちが行う行事は少ないのではないかと思うので、子どもたちにとってとても貴重な経験が出来ると思う。準備では、どうしたらお客さんに喜んでもらえるだろうか考えたり、お店の看板を作ったり、商品・景品作りをしたり、当日はお店番をしてお客さんと関わったりすることで、普段の生活では経験出来ないことがたくさん出来る行事だと思う。そして終わった後には、達成感を味わうことが出来るのではないかと思う。わたっこまつりでは、多くの人と関わることも出来る。他の学童保育の子どもたち、地域の人々、多くの人たちと関わることで、わたぼうしを知ってもらいたい良い機会になるのではないだろうか。

このようにしてわたぼうしを知り、学童保育を知る人が増えることで、学童保育に対する意識が高まり、学童保育が社会に広まって欲しい。